

教室紹介

京都府立医科大学 大学院医学研究科 感染症態学
中屋 隆明

〒602-8566 京都府京都市上京区河原町通広小路上
梶井町 465

TEL: 075-251-5326

FAX: 075-251-5328

E-mail: tnakaya@koto.kpu-m.ac.jp

Homepage: <http://www.f.kpu-m.ac.jp/k/did/>

[http://www.kpu-m.ac.jp/doc/
classes/basicmedicine/221.html](http://www.kpu-m.ac.jp/doc/classes/basicmedicine/221.html)



平成 26 年 4 月 研究室メンバーの集合写真

教室の沿革

京都府立医科大学は、1872（明治5）年に京都東山の青蓮院に設置された療病院を祖とする創立140余年になる大学です。京都市の中心部に位置し、西に緑豊かな御所（京都御苑）があり、東に鴨川が流れる古都の風情が漂う環境にあり、京都大学とは目と鼻の先です。私が所属する感染症態学教室は、微生物学教室と医動物学教室を前身として、平成23年度より発足した教室です。施設は旧医動物学教室を継承し、その歴史は1948（昭和23）年、伝染病研究所出身の小林 晴治郎 理学博士による教室開設に遡ります。その後、第2代 長花 操 教授（1959年-1970年）、第3代 吉田 幸雄 教授（1970年-1989年）、第4代有菌 直樹 教授（1989年-2011年）を経て、2011（平成23）年12月に私が教授として着任し、現在に至っています。

ここで私の経歴について簡単に紹介いたします。大阪府出身で府立高校を卒業後、北海道大学・農学部および修士課程において植物ウイルス学を専攻しました。1992（平成4）年より北海道大学・免疫科学研究所（現・遺伝子病制御研究所）において医学研究科博士後期課程の大学院生としてヒト免疫不全ウイルス（HIV）の持続感染機構の研究を行いました。博士課程3年次（平成7年）に助手に採用していただき、HIVの研究を継続するとともに、新たにボルナ病ウイルスの疫学研究にも従事し、これらの研究を基に1997（平成9）年に北大・理学研究科より博士（理学）の学位を授与していただきました。1998（平成10）年よりニューヨーク市マンハッタン北部のマウントサイナイ医科大学に留学し、インフルエンザウイルスおよびニューカッスル病ウイルスの組換えウイルスの作出系（リバースジェネティックス）の開発およびワクチンベクターとしての有用性を評価する研究を行いました。2002（平成14）年に帰国し、京都府立医科大学・微生物学教室において助手/学内講師として勤務した後、2005（平成17）年より、大

阪大学・微生物病研究所に新設された感染症国際研究センターの特任准教授（Principal Investigator）として研究室を運営する機会を与えていただき、インフルエンザウイルスの病原性解明に関する研究を開始しました。その際に、本誌（2009年：第59巻第1号）において当時の研究室の紹介をさせていただきました（http://jsv.umin.jp/journal/v59-1pdf/virus59-1_115-3.pdf）。

教育活動

本学は医学科と看護学科があり、医学科は教養教育教室、基礎・社会医学教室および臨床医学教室から構成されています。大学院医学研究科には修士課程（2年）と博士課程（4年）のコースがあり、医学部・歯学部出身者だけでなく、他の自然科学系学部からも多くの方が進学されています。当教室は基礎・社会医学教室（計15教室）の一つであり、医学教育として2,3年生を対象として、ウイルス学に加え、細菌学および医動物学（寄生虫学）を担当しています。その多くは座学ですが実習もあり、現在は年間12日（各々4日間）の計24コマを実習に充てています。その他に4年生を対象として6月中旬から6週間程度の（基礎）研究配属があり、教官指導の下、学生が終日研究室で実験に取り組めます。このように、医学部では、私がこれまでに在籍した国立大学の附置研究所とは異なり、教育に占める比重がそれなりに高くなります。そのため、その準備等に時間を取られることは確かですが、その一方で、ウイルス学以外の微生物学に関する最新の知見も体系立てて理解（アップデート）できることや、学生との密接な交流を通して、基礎医学の重要性や面白さを伝授できることが利点として挙げられるかと思えます。今年度は、以前に研究配属として指導した学生が、臨床経験を積んだ後に、大学院

生として当教室で研究することになりました。また、教授以下の教官数も基礎医学教室では平均5名（プラス研究員1名）と恵まれており、教育活動は分担して対応しています。

なお、大学付属病院における感染症の検査・診断は臨床医学の一教室が担当しており、一方で、学内・院内における感染症の教育・啓蒙活動には本教室も積極的に参加しています。さらに、京都府や京都市の感染症に係る各種委員会等への参加が、現在のアウトリーチ活動として挙げられます。

研究内容

当教室を含む基礎医学教室（6-8F）が入っている建物内に中央研究室（3-5F）や実験動物センター（B2F-1F）などの研究施設が集中しています。また、研究用のBSL3施設が動物施設内を併せると3室あります（幸運なことに、そのうちの2室は当教室が現在独占的に使わせてもらっています）。そのような研究環境の中で、臨床系の教室に籍を置く大学院生が、基礎の教室で研究を行うことがよくあります。当教室は設立してからまだ日が浅いですが、これまでに内科や産婦人科、あるいは歯科から大学院生が出向ってきて、ウイルス学や他の微生物学に関する研究を進めています。さらに、前任地である阪大において開始した研

究課題を京都府立医大において発展させています。第一に、高病原性鳥インフルエンザH5N1等のインフルエンザウイルス病原性の分子機構の解明を研究課題としており、「ウイルスの多様性・遺伝子型」と「宿主防御機構」および「病原性」との関連性を明らかにし、インフルエンザウイルスのダイナミズムを理解することを目指しています。加えて、生体内および生活環境中に存在する“ウイルス集団（Virome）”を網羅的かつ定性・定量的に解析するシステムを確立し、疾患への関与を含めたViromeの生物学的意義を解明することを課題としており、その一環としてハイスループット・シーケンシングによるメタゲノム研究を進めています。

おわりに

病原体に対する研究を通して感染症の病態を理解し、対策法を開発することが当教室のモットーであり、基礎研究を基盤としつつ今後は医科大学の特性を活かす形で、ウイルス感染症の検査・診断学や予防医学（ワクチン学）にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。この拙文を読んでいただき、当教室に興味をもってくださった方がいれば幸いです。特に若い学会員の方々への情報提供として少しでもお役にたてれば、と願っています。研究室のHPは<http://www.f.kpu-m.ac.jp/k/did/>です。

